



「お待たせして…」

「早く」と、子供とオセロをしているつい言ってしまう。次の手を考える子の間がとても長い(と感じる)からだ。私に負けまいと懸命に策を考えている様子なのだが長い(と感じる)。その点でパソコンのゲームはいい。自分の手の後、一瞬待てばまた自分の番になる。この「間」に慣れているものだから、子供とのゲームは苦行の感がある。「早く」と言うのを飲み込まなければいけない。まあ、いずれ立場は逆転して、子から「お父さんといふの苦行」なんて言われてしまうといけないから、じれったいなあと思いながら笑顔で待つよう気をつけよう。

リアルタイムで見るテレビ番組も最近はまどろっこしい。コマーシャルがじれったいのだ。テレビ番組を録画する昨今のレコーダーには、リモコンのボタンひとつでコマーシャルをパッと飛ばしてくれる機能がある。私のお気に入りの機能だ。この機能を使ってしまうとコマーシャルが長い(と感じる)。見たい番組は録画しておいて、後でコマーシャルをパッと飛ばして見ることが多くなった。

浜松赤十字病院は平成19年11月から電子カルテが導入されている。外来診察で患者様が目にされるパソコンの画面はカルテの一部で、主訴・バイタルサイン・検

総合内科部長 浮海 洋史



査内容・治療方針・処方内容などが表示されている。それを聞くひとつ前に来院患者一覧という画面がある。受け付けされた患者様のお名前と来院時刻が表示されているので、診察までどれだけお待たせしたかが一目で分かるようになっている。私の外来の場合「お待たせしてすいません」となる場合が多く、患者様には申し訳なく思っている。せめて、待った甲斐があったと患者様に思ってもらえる診療にしたい。

「待」という漢字を調べてみた。「彳」は道で、行くことを表している。「寺」は上の部分が手で、下の部分が足。手と足を動かすことでの仕事をする場所=役所を表す。用事のために役所へ行っても人が大勢なので自分の番を待つことから「まつ」の意味になった、とあった。ずっと昔漢字が作られた頃から、用事のために人は自分の番を待っていたようだ。

しかし、患者様をお待たせすることが当たり前にならないよう、努めなければいけないと思う。既におわかりのように、待つことが人一倍苦行に感じる自分だから、なおさらである。

やさしい 疾患手帳 病理ってなに?

病理部長 安見 和彦

皆さんは病理科という診療科があり、病理医という医師がいるのをご存知ですか。

大学などの研究施設で顕微鏡を見て研究をしている医師が病理医でしょう、という方もいらっしゃるかも知れません。

しかし普通の病院でも病理診断を行う医師として、他の臨床科の先生達と一緒に働いている病理医もいます。

浜松赤十字病院での私の主な業務は、



生検診断

治療方針を決めるために、消化管や肺などから内視鏡で採取したり、皮膚などから直接切り取った組織を標本にし、顕微鏡で病变を探し診断します。

手術で摘出された臓器・組織の診断

手術で摘出された病变の標本を作製し、顕微鏡を使い診断します。どのような病気がどれくらい進んでいるか、病变が全部取れているかなどの情報を臨

Profile プロフィール

やすみ かずひこ
氏名／安見 和彦

- 所属…病理部 ● 役職…病理部長
- 専門分野…一般診断病理
- 自己PR…患者さんとは直接お会いしませんが、よろしくお願いします。
- 趣味…食べること
- 好きな食べ物…おいしい料理とワイン
- 座星…かに座 ● 血液型…A Rh(+)

床の先生に提供します。

術中迅速診断

手術前に生検診断ができない場合、手術中に採取された病变組織を短時間に診断します。それを元に臨床の先生が手術の方法を確認します。

これらの業務は病理医の居ない病院や診療所でも日常的に行われていますが、病理医のいる病院では臨床科の先生と病理医が直接対話をしながら業務が行われています。特に術中迅速診断は病院に病理医が常にいないと実施できません。

ボランティアサークル『陽だまり』が中日ボランティア賞を受賞



中日ボランティア賞を受賞された皆さん
(物部さんは前列右3人目)

10月19日(水)、第28回中日ボランティア賞贈呈式がホテルコンコルド浜松で開催され、当院ボランティアサークル『陽だまり』が長きに渡る活動が評価され表彰されました。

中日ボランティア賞は、様々な分野で社会福祉に貢献している団体を讃えるもので、今年は7団体が表彰されました。いずれの団体の活動も地道な努力によって継続され、社会に温かい心の大切さを伝えています。

贈呈式で、受賞者代表の挨拶を行った物部範子さん(当院ボランティアサークル代表)は、「活動は、特別なこ

とをしているわけではなく、日常の一環として行っています。してあげるのではなく、させていただくという気持ちを持ち、笑顔で人に接するよう心掛けています」とボランティアとしての心構えを語ってくれました。

「患者さんから声掛けやお礼の言葉を頂いたびに、良い関係になっていると感じています。これからも、患者さんの癒しと潤いの活動になるよう努力していきたいです」と静かに微笑んでくれました。

第14回浜松赤十字病院院内学会について

院内研究部会 柴田 幸信

平成23年10月18日(火)、院内研修ホールで第14回院内学会を開催しました。

発表は10題で、各部門より演題が寄せられました。概略は、医師支援業務(企画課)、医療と介護の視点の違い(地域医療連携課)、手術室看護師の災害に対する関心と意識・知識の関連性(手術室)、入院センター開設の効果(看護部)、訪問看護ステーションに対するPT・OTの関わり(リハビリテーション技術課)、睡眠時無呼吸症候群のスクリーニングにおける夜間SpO2モニター(検査課)、マンモグラフィー検診施設画像認定取得(放射線画像診断課)、簡易懸濁法アンケート(薬剤部)、気腫性胆囊炎の1例(外科)、アミオダロンによる薬剤性肺炎の1例(循環器内科)でした。

多くの職員の出席を得て、熱心な質疑応答が行われ、院内各部門の交流が図られました。最後に院長から演題ごとの講評を含めた総評があり、盛会のうちに幕を閉じました。



演題を発表する神田医師

～第1回 職場改善活動表彰事例発表会～

院内学会前には、職場改善活動の事例発表会が行われ、6つの事例が発表されました。

【発表事例】

- 準グランプリ「正面玄関前の横断歩道設置について」(看護部、コンシェルジエ)
- 院長特別賞「病棟ガラス清掃の頻度増」(サービスエム)
- サービス向上賞「朝食時間の早期化」(栄養課)

節電の取り組み



当院では、今日の電力需要・供給状態を考慮して、少しでも多くの場所に電力を供給できるよう、院内照明の一部消灯など節電に協力しています。

この結果、この夏の節電対策効果は、前年と比べて電力使用量が10%低くなりました。当院では冬場に向け今後も節電対策を継続して実施していきます。ご不便をお掛けしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。